

## 優 秀 賞

水を得るために

竜ヶ崎第一高等学校附属中学校

二年 園 田 桃 子

私は、日本に住む十三歳の女の子。彼女は、エチオピアに住む十三歳の女の子。午前六時三十分。私は起きる。彼女は水を汲むために歩き始める。十時四十分。私は学校で授業を受ける。彼女は川で茶色くにごった水を汲む。十一時二十分。私は授業を受ける。彼女は帰路につく。午後四時二十分。私は部活動が始める。彼女は家でご飯を食べ、水を飲む。九時三十分。私は課題に取り組み。彼女は眠りにつく。そして、また一日が始まる。

私は彼女の存在をユニセフの動画で知った。彼女はわずかに五リットル未満の水を汲むために毎日八時間を費やし、時間と教育を受ける機会を失った。彼女の生活は私の生活とはあまりにもかけ離れていて、

想像すらできないものだった。しかも、このような生活を送っているのは彼女だけではないのだ。世界中の女の子や女性が水汲みに費やす一日当たりの時間の総計は二億時間に上るといふ。この現状を、どのくらいの人が知っているだろう。

なぜ、日本とエチオピアではこんなにも生活が異なるのか。水は絶えず循環しているため、上下水道の設備が整っていれば、日本のように誰もが安全な水を継続的に利用できるようになる。だが、それには多額の資金や高度な技術が必要なため、その状況によつて、設備が整っている国と整っていない国が生じることになる。それならば、日本の水を送ることができたら良いと思うが、水の運搬にはお金もエネルギーも必要のため、実現は非常に困難だろう。

住んでいる国が違えば、生活環境も違う。生活環境が違えば、「水」も違う。これはあたりまえなことかもしれないが、私はあたりまえという言葉で済ませたくない。そもそも自然は、人間のものではなく地球のものだ。だから、人間のためにも地球のためにも、水はいつも美しく、誰にとっても身近な存

在であってほしい。

そのために、私たちには何ができるだろう。もちろん、まずは節水が効果的だと思う。今すぐ始めることができる手軽な取り組みだからだ。一度に大量の水を減らすことは難しいが、コツコツと続けていくことで確実に水を減らすことができる。例えば、お風呂の残り湯を捨てずに、洗濯や掃除、植物への散水に使用したとする。残り湯の半分を再利用することで、約百リットルの節水になる。これを一ヶ月間続ければ約三千リットルの水を節約することができるのだ。この取り組みを日本全国で行えば、もっと多くの水を確保することができるだろう。

次に、地産地消を行うことだ。日本は海外からの輸入に頼った食生活を送っているため、バーチャルウォーターの負荷が問題になっている。バーチャルウォーターとは、食料を輸入している国が、その食料を自国で生産するために必要な水の量を試算したものである。食料を輸入することは、食料を生産している国の水を輸入していることと同様だ。よって、食料を生産している国の水不足を加速させてしまう

恐れがある。地元で生産された食料を地元で消費することは、バーチャルウォーターの削減につながる。と考える。

また、私の学校では水道の蛇口に自動水栓を取り付けている。自動水栓とは手をかざすと水が出てきて、その後自動で止まるといふ器具だ。清潔に水道を使用でき、さらに節水もできるので大変便利だ。水は限りある資源だが、私たちの行動次第で持続可能な資源にすることもできる。

午前十時四十分。私は今日も学校で授業を受ける。彼女も学校で授業を受ける。水道の蛇口をひねるだけで、透き通った水が出てくる。だから、もう誰も水を汲みに行く必要はない。そんな生活が日常になることを願っている。